

第 52 回(2011. 5. 17 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「タバコ(煙草)」

清酒やワインなどアルコール類を飲むときに欠かせないのが「つまみ」である。しかし、雲竹齋の長い人生経験上、もっとも良いつまみはタバコである。タバコというヤツは気分を落ち着ける場合もあるし、何よりも困った時や面倒な時には、しらばっくれて文字どおり相手を「煙に巻く」ことができて良いものだ。

情緒豊かに(キセル)

タバコにはいろいろな楽しみ方がある。タバコの葉を石灰や香料を混ぜたハーブなどとともに口の中で噛んで味わう「噛みタバコ」があるが、噛んだら吐き出さなければならぬ。ニコチンの毒性が強いため、いい気持ちになって飲み込んでしまうと、あの世にいつてしまう危険性がある。また、「嗅ぎタバコ」は、文字どおり刻んだタバコの葉に香料を混ぜて鼻先にもっていき、匂いを嗅いで楽しむ方法である。ほかにも葉に香料を混ぜて巻き、それに火をつけて煙を吸う「葉巻」、あるいはパイプに詰めて煙を吸う「パイプタバコ」などもある。日本ではあまりお目にかからない「水タバコ」があるが、これは煙を水に通すことによって煙を冷やす効果があり、かつ長時間楽しむことができる方法で、暑い中東では主流だ。

日本では紙巻きタバコが主流だが、それ以前は刻みタバコをキセル(煙管)の雁首に詰めて吸ったものである。キセルとは、タバコを詰めて火を付ける金属製の雁首と吸い口、それを繋ぐ竹製の筒からなっている。一種の「パイプタバコ」だが、この筒を羅宇(らお)という。昔はラオス産の竹が良かったらしく、そこから「らお」と言うようになった。ちなみに、キセルはカンボジア語のクセルが語源である。羅宇にはヤニがたまるので、パイプ同様ときどき掃除しなければならないから若干不便ではあるが、キセルは物を指し示す棒の代わりになったり、雁首に物を引っかけて手元に引き寄せたり、時には人の頭を叩いたりできる便利な物である。その昔、吉原の花魁はタバコに火をつけて「ヌシさん、吸っておくんなまし」と言って、馴染みの客に長いキセルを渡すのが仕来りだったし、インディアンは人が訪ねてくれば、長いキセルでタバコを吸って「オマエ、トモダチ、タバコ吸え、インディアン嘘つかない」と言ってキセルを渡したものだ。情緒豊かな時代だった。しかし、紙巻きタバコはどこでも手軽に吸うことが出来、どこでも捨てられるから始末に負えない。だから嫌われて目の敵にされる。便利さ故に滅びるのだろう。人間の生活もますます便利になってきたから人類はもうじき滅びるに違いない。

しかし、残念ながら、タバコは健康を害する恐れがあると指摘されてから世界規模で悪者にされてしまった。だから、常に赤字予算を組む日本政府は税収アップ策となると真っ先にタバコ税をあげる。まことに気の毒な存在である。タバコの語源は、スペイン語、ポルトガル語のタバコからきているが、もとはアラビア語のタバク(薬草)からきたものだろう。タバコの木はジャガイモやトマトと同じナス科の植物で、現在のタバコの祖先は 10 万年前に南米ボリビアあたりで出現したらしい。およそ今から 1400 年前のものと思われるメキシコのマヤ神殿のレリーフに、タバコを吸う神様の像が刻まれているから、タバコを吸う習慣もやはり南米ボリビアあたりで始まったのではないだろうか。ヨーロッパでは 1492 年コロンブスが西インド諸島サンサルバドル島を発見した際に、先住民族がタバコの葉贈ったという記録が残されているから、そのころからヨーロッパに流行したものであろう。1601 年にスペインの聖職者の一行が徳川家康にタバコを贈ったという記録があるから、日本に渡ってきた時期は慶長年間(1600 年前後)と思われる。

日本では「日本たばこ産業(JT)」が唯一タバコを製造販売している。昭和 59 年(1984)に、それ

までの「日本たばこ専売公社」を民営化して引き継いでいるからで、タバコの原料となるタバコの葉は年間およそ 600 万トンだが、これは JT と契約した農家だけが生産し、生産されたタバコの葉はすべて JT が買い取ることになっている。これは「たばこ事業法」という法律で定められているからだが、当然生育した葉の横流しや転売はできないなど制約がある。タバコの葉の生産量はアジアが 6 割を占めている。日本では宮崎県がトップだが、葉に含まれるニコチンの毒性から養蚕農家には嫌われて、養蚕業華やかになりし頃はかなり苦労して育てたものである。生育には十分な太陽光線が必要だが、昔から日かげの存在だった。

男の権威が弱体化したのは

タバコが値上げされればやめる人が多くなる、とマスコミはわめく。確かにやめる人はいるだろうが、実際には少ない。完全に麻薬と同じで依存性が高いから、簡単に「はい、そうですか」と止められるようなものはない。以前の話だが、フランスでも値上げすれば止める人も増えるに違いないと考えた政府は大幅にタバコ税を引き上げたが、実際はやめた人は 2% にすぎなかったとの報告がある。フランスは健康面から税金を値上げしたが、日本は健康問題より税収がひっ迫したため値上げしたところがフランスと日本の違いである。もっとも、日本は先進各国に比べてタバコの値段は決して高くはない。

雲竹斎も若いころは 1 日に紙巻きタバコを 60 本以上吸っていた。しょっちゅうマージャンなどに興じていたが、その時は 80 本から 100 本吸っていた。大病で入院生活を送り、家内から「もうじき子供が生まれるから、赤ん坊の健康に悪いし、お金もない」と泣きつかれたからやめたので、そうでなければ絶対にやめなかったに違いない。一種の麻薬のようなもので、いったん吸いだしたら簡単にはやめられないのがタバコである。やめて何十年も経つが、今でもタバコを吸って「しまった！」と飛び起きることがある。これは精神上良くない。やめたら手持無沙汰になって、つい飴玉なんぞを口に入れてしまう。その結果メタボになってしまった。やめて後悔しているが、あれだけ医者や世間から「タバコを吸うと長生きはできない」などと脅かされれば、再び手を出す勇気もない。この雲竹斎先生も、じつは命が惜しい小心者なのだ。

タバコに含まれているニコチンの毒性は強く、昔は果樹園などの消毒などにも使われていた。ある女性がタバコ 10 本を浸けた水をコーヒーに混ぜて男に飲ませて殺したという事件もあった。男女間のもつれからだったそうだが、タバコを吸って気取っている男性諸君、気をつけよう。今では日本人の喫煙者は約 3 割に減ってしまったそうだが、ときおり、団地のベランダに出てタバコを遠慮がちに吸っている人を見かける。こういう人たちを「蛭族」と呼ぶのだそうだが、いかにもさびしい。家庭内で喫煙場所を取り上げられ、男の権威が弱体化したからだ、などと嘆く評論家がいるが、冗談じゃあない。ズボン全部脱いで、しゃがまなければ小便ができない青年が増えている。家庭内で男性用トイレが無くなってから、ふんぞり返って立ち小便が出来なくなった。これで、もう男はだめになったのだ。決してタバコのせいではない。

本音と建前(アラブの水タバコ)

中東・アラブのカファ(喫茶店)では、水タバコの器具を常備してある。大きなフラスコ状のガラスの器具で、フラスコの頭部にタバコを詰める火口があって、横から長い管が出ていて先端に吸口が付いている。一種のパイプだが、カラフルな糸が織り込まれていて非常に綺麗だ。頭部にある火口にタバコを詰めると、店の親父が小さな炭火の起きた奴を持って来て火を付けてくれる。フラスコの中の水を通して来る煙は冷やされるから暑い中東では喜ばれる。長時間楽しめるのが特長だから、各自が工夫した香料とか、時にはハシーシーなどの麻薬を入れる場合があって、当局は目を光らせる。ハシーシーは、インド大麻の雌株の花序や上部の葉の樹脂を固めたもので、覚醒作用がある。おまえは中東勤務が長かったから、大麻や麻薬をやっていたので詳しいのではないかなどと思わないでほしい。雲竹斎は専門が植物繊維だったから麻についても詳しい。この大麻草は高級服地に使う麻の木と同じ仲間だが、大麻草からは繊維がとれない。全く取れないわけでは

ないが、質、量ともに商品価値はないからだ。

ところで、中東・アラブの人たちはお喋りが好きだ。だから昼間からカフェに入り浸るのだが、水タバコをゴボゴボいわせながら、口から泡を飛ばしてお喋りするの、いくらお喋り好きな彼らでも無理な話だと思うのだが、これがどうしてどうして、ゴボゴボベチャクチャ、ベチャクチャゴボゴボと器用にやる。水タバコが主流の中東でも、最近の若者は紙巻タバコをやるようになった。人が集まる場所では、自分がタバコを吸いたくなると、周囲にいる人たちに必ずタバコの箱を差し出して、「どうぞ、どうぞ」と勧める。周りの人も遠慮もせずに、差し出された箱の中からタバコを取り出して啜る。おもしろいことに、一本しか残っていないタバコの箱を差し出す人がいる。せっかく出されたものをお断りしては失礼というものだから、遠慮せず一本しかなかったタバコを貰ったら、彼は空き箱をクチャクチャに握りつぶして、思いっきり地面に叩きつけた。きっと雲竹斎が遠慮するものだと思ったのだろうが、残念ながら自分の物は自分の物、他人の物もできれば自分の物、遠慮や情けは無用だ、本音と建前は別なのがアラブ社会だ、と最初に教えてくれたのが彼なのだったが、彼はそのことをすっかり忘れていたのだ。